

【変化を続ける森の姿】

図2には、胸高断面積（きょうこうだんめんせき）合計と立木密度の経年変化を示しています。胸高断面積とは、人間の胸の高さで木の輪切りをとった場合の断面積です。まず下の図を見ると、2000年と2002年～2003年にかけての2度、間伐が行われ、立木密度が大きく減少していることがわかります。一方、上の図を見ると、2回の大きな間伐によって、胸高断面積は若干減少していますが、すぐに上昇し、次の年には、間伐前よりも大きくなっています。一方、最近では、間伐は、ほとんど行われておらず、胸高断面積の成長は大きく低下しています。これは、間伐が遅れていることに伴って、樹木の成長が鈍っているためであると思われます。現在の胸高断面積は90m²/haほどになっています。この値は、非常に大きな値です。例えば、篠原ら（2010、日本森林学会誌）は、福岡県糟屋郡篠栗

町の管理が十分に行われていないヒノキ人工林（50年生）では、胸高断面積は62m²/haであったと報告しています。表1を見ても分かる通り、今年も樹木の幹周りは、ほとんどの木で大きくなりました。しかしその成長は、年々、鈍化しています。調査区のある場所は、シンボルツリーが育つ森を目指しています。そのため、今後は、間伐のペースをあげ、樹木が十分に成長できる適切な本数にしていくことが望まれます。

【今後の課題】

長年の調査結果を取りまとめることで、カブ森の変遷と現状を知ることができました。来年度からは、どういう調査を行えば、より有用なのか、考えていきたいと思います。

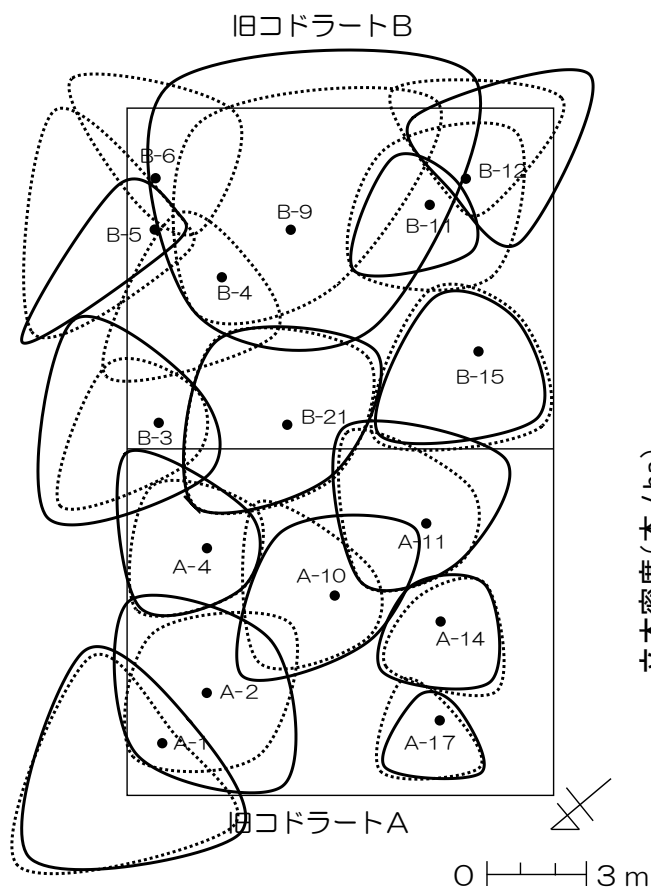


図1 樹冠投影図（点線は昨年の計測結果、実線は今年の計測結果）

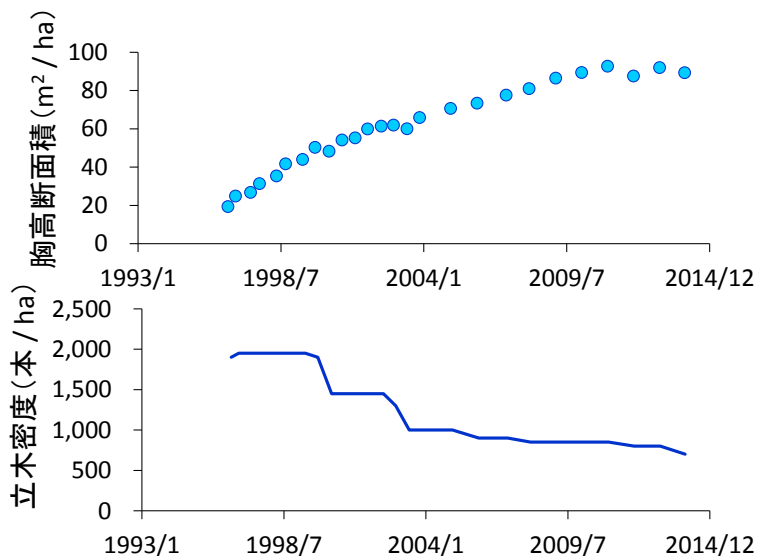


図2 胸高断面積合計と立木密度の経年変化